



新板  
繪入

赤深淵の凌雲

二



遠  
1648  
2



赤深清門續集

二之卷

目錄

才一

娘六彩ひハ筋二筋小遠人親人

母江取分子小甘ひ甘竹矢見

歳々急所打八行改意登鏡人

着使も思ふに美に流り美の舞



赤深清門續集

カ



才二 君也妹背たるもく後も更なる血令

其身を多にたはれ浩く海に切其腰

又下はく利きと娘は御金ふまの区

名も傍る赤深赤元腸に坊をけり

才三 高貴は先持れあひ穿入世渡車

心は圓の二袖も持人ふりて心真

僧の乃つと墨深うも尾はれ極山

己の字娘ふて迦河らる板寄持

一 娘の親いふ二袖小速子親心

か小枝と辞するれ礼あり馬ふらぐみ反はれ孝あり會歎

かたの如しんんや仁義の良智のうん思と得て恩を報

せふはかたるに方とて海木石の端小塵一昔履に矣

わらんや會歎といふも口時の感とさ一嘗此之先と

嗚アそん小毛きく後物も狂一狂と呪て人小枝抱を

らねもて地るに生とて一狂と得ら故之本石八翻

曲足下く人もね一人小枝あうられても後もそん

長付て中へ杯バ親といふ抱もあく世小無益れ抱るれば

さげしやの色高生小と考つて一はま小わし心はゆき事

兵衛と考ると考つてはあり玉後娘れ又赤深赤の時用は

先に兼盛が討つる矢迄乃血縁連邦小落をるにし  
 思ひ寄次も佐小親王味方小属一娘玉後も養ふん  
 然掌たる狩小もておしき場をのりき若小立御り  
 あり重なる重敷とて碎くゆき内小惟茂の方あり  
 給ひつゝあめ娘れ致さ母君も同じ思ひ小親王を  
 とはちこしとて小親王よりおさしとて父のち小親王に  
 人々用ありげある親付小て立にどい居くゆきと時  
 用おくもんでた又惟茂と致ねこの親ひつゞく小もたぬ  
 操といふ小女けつんべとて娘けさるる小奥書もあつた  
 物乃親とあへてんれよ君より大臣とて文一あり傾小  
 君小羈とつら今とて致て恥あり親小世とて掃とるれ  
 世とて親お人れ汝法元と武士多りおれん得もすべし

たとはをき天を乃比将門退付れ宣旨致八民部は  
 乃忠文小取一下とゆとの使文又が宅小入折一も  
 して居られ一が角とまより親と投打をてきて  
 再ひ飯宅とて並に海陽小あつとゆん勇士れ志とあ  
 のし一史月とを小あゆも世居次くれ人柄とて  
 聲小ためて不足もあけきと大盛る親者とあつた  
 小と娘が送られつるおん小もつちあひとふあひと  
 何小いひおとせ親も分りちつとつとるも泪小くゆ  
 親王れ上使伊波の兼盛上下の折自さくを後小  
 時用丈ぬ娘を佐小出迎ひしゆりく是へと致ひ  
 小のりて小づくあを盛る親王作付らつとる余の  
 につく次息女を後居を日吉日とあつと婿婿の儀式



井原卷之三

ぐんと變つてさういふに於いてまはさるりもせぬハ例の時  
 用が内股膏茶あらしむもあらくもあらくこれぞやけで  
 はあんどごうこれお怒つと菓小あり悦交り付べしといふ所  
 ハ表よりありありし我義はなれれをの志あがゆきまは  
 何ともあふ首尾してくれよをいひんといふ身内があらる  
 と互せふみ十番れは果報で無事さへいれ我拙まじきいよと  
 合せてれお款ご思へを痛ハももあり笑ふをましなむいれ  
 かしあつくにまつてその清くぬいんといふと婿津へ中絶  
 致しも此も今身つせゆりやさんい夫婦よりも遠青  
 はさすいお娘来さるされいといふうれ兼盛が仕あ  
 娘ふといのり五事う仕給ふとすの清くり款れをい  
 赤坂門に忠告と亮りけいきて上使れあふはも成され納

これ後持ふせひが娘小を種まで款まはれれ枕の室か小余り  
 仕合られ大妻是ふおは娘とともんと父合まは侍ら  
 く奥方依金おをみ出せしやあまの心一ッでた娘小か  
 父抱ぐても娘小ハ母款決事とていふお娘もさる  
 御命は清合おられし清ての後悔さのうりと娘小と  
 いひませ地清をせれと此半無惣扱もともあつて下さり  
 せせしてれおせいりり妻は向ふ時用んといひてさ  
 にあい女房娘れ子ハ母親決事とかい年のがとらが海く  
 とんあつあつういといれハぬぬえれとさひ後合もさる  
 だごうおおあつゆ花だんいんサあといふであらう身が海く小  
 もとあつあつにともあつた物ハ嫁れたるいひても兼盛  
 殿ふもよくの合意しゆりす親とれ終せハ縁言も同

おもむく一白のさかすもいふまゝにこれいふことと背らん禮を  
 うらひらうては清やたが何と身たがはひまりのある程くまへ  
 すしとねらふ実親とねらぬ娘とあがらあんでいもいづらとあや  
 るし油とゆらゆらとねらぬと今らうり身うらふらねあふ百方  
 云ぬらうとだててしけいあうらうけたところ彼娘うら女け  
 るもて牛糞まぬとらうらんでか所やもこと何とけりア娘い  
 やり怒り今が絶命絶命兼整屋ふもねらぬけりお小娘  
 不纏としていぬ言うよいと。したるまにけりいもあ  
 後での字争て居れぬ母も情うらうまとのあせりこれ  
 玉後泣て居てゆは海ぬいあうらうとツイとあふえてま  
 ぬいのまうらうらうらうらも後小別らあうらうらうら  
 娘中うらうらとあわげとんあうらうらうらうらうらうらうら

てんても親とねらぬらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 色でうらうら小娘整屋あうらうらうらうらうらうらうら  
 美整小親とねらぬらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 伊波兼整屋の外ねらぬらうらうらうらうらうらうらうら  
 厚小居とねらぬらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 云合れ初集か夫とん小掬ねらぬらうらうらうらうらうら  
 一はんをての情と時の悪と品と娘と家前と実出と熱  
 娘よ娘ともあぬらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 て叶たぬ場と内池でねらぬらうらうらうらうらうらうら  
 ごとく切ハ娘がたうまひあうらうらうらうらうらうら  
 旨味とつ成竹田とゆらうらうらうらうらうらうらうら  
 濡し是うらうら若諾け男も敬彼でありた一場は責てねらぬ

ハハまゝいと懐中分古う纏尺方出し一奥方足漬てみ  
まを依座の衣箱小色中てなとみろハ首の弁あがき  
と色小出小くり糸糸ハ物や思ふ人けそふぞてい弁ハ自  
かえあつて弁小出もえあつて小出ふした伏てけ纏ハ物  
ふ定し極まりこそんち中うか吐しひきき言きてぬ極まり  
つて別よハあひ妻しひひりハそらにえへあつて何色ツカ  
い志重ハあおれにぬも魚登格扱ハ十六年ハお大也又  
仕上ハ衣箱の衣箱の廊下ハ物もふふふたけ  
大も消され終つたけつと終つても作ハあつてはううう  
とむうて思ふもとま小出より我思とすまひ給ひ  
まも弁の衣箱であつてつと初めて驚く昔は始つて  
も死して終つて終つて終つて終つて終つて終つて終つて

二 恩也妹背く物とて泪も更紗無

うまふと泣よりつと世は法もあつた娘とほさつて文ねん  
あまのうまふのこれ作い果れ中ふも昔と成りす魚登  
ふ纏あつて終つて終つて終つて終つて終つて終つて終つて  
れ物纏あつて時周弁終つて終つて終つて終つて終つて終つて  
が終つて終つて終つて終つて終つて終つて終つて終つて  
娘君小弁ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
ふも面目なむもと魚登格小に話してあつた二度の  
い麻痺れ情も後初よあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
涙くはみい家へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ嫁へ  
とけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ



伏ハ奥引いさえまぎていふまひくんと新あらたくしてあまた角かどつくと  
 是こゝ北きたがあひ時とき用もち格かく殺ころして下くださんせと浮うき身みと信しんの懺ざん悔かい也なり  
 其その時とき移うつきハ無な整ととのすう時とき用もち度た度たびけあり衣え刺されむり泣なきの  
 格かくりもあふむらんあふまてらん酒さけをこ儀かぎとれう後あとかぬをね  
 申まを実まことの入いてあつねむりけりもまうつうねるま格かくもまた  
 ぐい小こ友とも中ちゆう回かい士しでさるゆ何なにもせよまは年とし月つきのいひ  
 小こ後ご害がい三さん玉たま後ごもさかんれ娘むすめとあひ信しん事じ万まん端たんを悪わるめり  
 ものり公こう養やうて喰くふと焼やて喰くふさう流なが身み体ていを女に師しもと  
 うあふて親おや王わう格かく上かみ給たまへり一ひと切きもつもの娘むすめもやまこよとたて  
 引ひんとすまハ酒さけアゆてりえん新あらたかんがりふ身みれ新あらた格かくても  
 押おしつ成なりらるるはこいやくういふ我われ親おやれつらるるといひ  
 いさく能あたさハ殺ころくまを信しんどもあんなり大おほ悪わるでれ送おくまごが

去いてゆきひ物ものくゆて下くださんせやふとまぎとていさるる  
 時とき用もちんひて二人ふたりとたて実まこと殺ころしとも何なにどく懐なつかより經へい尺せき  
 去いて板いたえ出でし女に房ぼうもさかんやまごあふりんすりまきけ  
 をすしんで寝ねあまが物ものと小こ板いたゆてりむむり月つきとにじが  
 けきもこれさつは救すくあつたわさしとさひ。後あとあまが物ものは  
 小こ板いたふらうまやぬりうの信しん僥ごうてんやうくも傾かたむく月つきと信しん  
 めきしとの詠えい弁べんれする花はなわけてあんなきにえまきしとま  
 めらんとあつらうさそ整ととのり和わらう時ときの弁べんま板いたもあふ  
 娘むすめとモウヨイなる風かぜすうあひとを娘むすめにらり白しろいアし  
 うみ自分おれか一人ひとりうえんあふても定め難むづかし血ちの触ふれ心こゝろ探たずなり  
 乃すなはち後あと考こう度た度たい亂みだり給たまはるあひふもせよ十六じゅうろく年とし月つき日ひ  
 一度いちどの同どう者もの信しんもせよと背そむ長ながのひて人とありふは是こゝろのこり

少とちうはふいふと猪のふふれたとて俄に娘よあまよ  
人情小をりきく一仕方実れ親でも其才もさき氣地よ  
書て令嬢系流の自分分が候ははをせむさぐう力一家胤よあ  
らざり娘とまをく幼少よりとごらみ重くしてあてといはれて  
海女時ハ歌のうくもせれ此守虎為者といはれてハ時用ガ  
頼りよごぼく今く惜んでぬし又惜まぬでもごさうぬけ上  
拙まうしを暗娘玉後と血合が致してんさひ男が胤あられ娘  
もあられ血と合とたつよあじ兼登殿いごあられもや  
あられハコリマ一候し所むさよあられ血合あり大貝合あり大  
さえれ救急の身よあられハ拙まハ願けさし仕方と毛抜  
出しをれん娘をハ白福代許よあられ吸入く拙出ると時用を  
へくとをんをくむさを拙治ぬいて拙押切研水に

血けけ濁れももよあられハうりよあくと振ひぬくも玉後  
の筋又拙あられの指先切れかゝる目も妨さ許のこと小  
同じく流れわりの血けハわりの後流すの陽をいよとなく実  
付ても差改ても只散然しかるまじけ親よ八月と目とん合  
て拙一初もかうりせりあざりし許もさうもあられ時用殿  
は海女あられさうアからハ大幸代娘はて居るとあて用  
さ今物うれちち中も移も氣指もや果とて事とあられ  
せりさう娘ハあられあられ今も又と又もいひのパー  
時用柄け付付小ぬまう一さきバどよまても親王柄のゆり秘  
ありまをあられ一伺して時用物と定め娘とらに一本とあられ  
あられがうり血とさけと親う大切う若果のとうくお育りま  
い親う大切う何れ親代初と男ゆりさうぬ一本とあられあんと





想れ兼盛姫の志を承りてしけぬくおのハ路をこ入る  
人々もなからてあはれ玉後後健氣ふも某に滅れ親と  
ありはくも若く父も立てれば仕方感てても余りありらる  
能く人け弁とい授小佐重者どうぞり血とらり一子け親  
に取と海して九つれ様子ハつとせや所今一つ目で伝神小  
高ももつても四十年來ゆりめん多り懸れじらひ談思も  
代承弁れ玉玉後後代義神懸懸と云く一人の心一實神の  
初め勅勅と世のりまより流とつてます一の方ち流との義  
聖と平氏とれハ停波れ兼盛の義年の比より和弁れ女小  
て何有れ娘もあろう人小件れ能く人家よに入らざる事  
れとて竟とさみき一過延多小も死後れ名と出らみ  
とる家ととも流じり一傳ハ懺悔といひ流りて高下

しとぬふくは時用懸流とて居たり一何とあひん  
指添ぬいて懸押切長懸と流して何せに并旗とらるも  
生前もあれおやうと老も老もも海くハこや家今自  
より武士とゆえんはれた小入ざりされ之先被より傳へ  
家名柄あ人もなとさあ福ハ赤漆あつとつる家わがをと娘  
の身は流る一自然大内小探集れ山山流あらん時ら  
流捨し能弁とい身が名とせ出とあつたま死をたやま  
色牙れ懸もとあつととけりらひ乃らしてゆくとと  
流出ゆよ

三 高賣ハは先々孫の心守人の世は系

士農工道とふれ家凡と身と死と死痛いよあ





か一軸をえ出—懸よこせて勢をハ大小依ひりらて  
海りまよりたに床に懸て—から内氣をとりつるる  
え出—何れ惜字もあく件を把とどくくに—  
おろの息をせ—先れ男あり合を何ゆへ角ハたあふ  
お路るさるぬれでされば—あふ宗神古懸れ食地とけ  
懸るをハ致せ—床小智直放く見申せば—  
このろ—念仏の二字が氣をりいふ—しても懸掛小  
まけらめていらんれ仕合思ハ大車れ香合—  
いと流ハ後ひふありにりり—  
と流ハハ後たのばて好くと懸—  
とよてとのい—  
合と—

—  
す—  
あ—  
祈—  
と—  
五—  
あ—  
小—  
と—  
い—  
か—

示



小婢小波を片紙もねごととれて二人の懐を巻紙で包めり  
こせ神と月とわがあつたうらむかかを板のついで紙拍  
ぬとれ見識いふれあひとは横うして立ちあがりぬい  
唯こま言奇きねハもくうまゆりうてふゆふゆふの  
拙信ハも方活あちりしぬ光あつねハね徳大脚云  
あつと乾小波とせしと六撮合もつひびくま  
つとこれ海ふりふにハぬさくも是ねがあひま  
あつてゆきあつとまよと別色をぬゆりしと  
ゆりして香を附け不換金と小向ひゆりし  
に先生れたる度くおれかくゆりしと所ハ松清家  
店のちえいが一両の先に歴くとおもゆり  
件のちえい店よ立ちりしとね物見より先  
御こせぬ海しと

御ひしとけは蓋もあひがうらな茶入と掛り  
玉瓶と瓶のさきしに内と掛えと懸つと家来は  
ぬ振しと田つと遠入しとねは少く偏屋人  
とさうしとねとあつとゆきととゆきと  
侍店先よ飛て出イヤ九文でいと出せ  
てはうらとつとの加減であつとひは  
はは偏屋の儀をかくしと板に  
なむとねとねとあつとゆきととゆきと

